

老いらくの遊戯—良寛の手鞠—

膨大な情報がデータ化されている中で、老病死の現実ではさるなら見たくない超高齢化社会。新しいウィルスに右往左往しているのは命に直結しているからだろう。ユングの発達理論によれば四十歳が人生の正午。宮柊二が「コスモス」を創刊したのは四十一歳。応召入隊、敗戦を境にした価値観の急激な変化。混乱の時代に奔走された前半生である。

一 宮柊二の歌のなかの良寛

良寛は江戸末期の越後の出雲崎で生まれ、十八歳で仏門に入り備中の曹洞宗円通寺で修行。諸国を巡ったのち四十歳前に故郷に戻る。歌は万葉集に傾倒して筆写した五合庵時代からの作品が多い。托鉢して回り、子供たちと遊ぶ。友人の訪問を歓迎、お札の手紙に歌を添える。老いや病もあるがままたに詠み、自らの手で筆をとった。宮柊二の第八歌集『獨石馬』以降の作品に良寛を散見する。

冬の夜の長きまにまに良寛の詩や白秋の歌
に遊びつ 『獨石馬』

林本の良寛歌集披き見てとしの陸月を家
籠りする 『忘瓦亭の歌』

仮住みのこのマンションに運び来ぬ良寛像

百留ななみ

と魏人の俑を

『緑金の森』

父の齡はらに至らざれども良寛の示寂に近し病

みつつ我は

『白秋陶像』

一首目は糖尿病発症後の五十七歳の作品で老いや病の歌が多くなる頃。戦争も白秋逝去も大過去となった冬の夜の慰み（まにまに）は良寛の歌にもよく使われている。敬愛している二人であるが、良寛の詩と白秋の歌が句またがりの屈折したりズムの中で並ぶのは興味深い。良寛の漢詩について、柊二は『良寛の世界』の「良寛の人と歌」の中で「思想はいずれも明確な表現を得て激しい。歌の対人感情の明朗親切に比べて、本心を吐露することくよほどきびしい。」としている。二首目の林本は昭和五十二年刊林甕雄本の『良寛禪師歌集』か。発刊間もない良寛の歌集。『西行の歌』の上梓のあと、家籠りの六十五歳の新年。漢詩との違いを享受しながら歌集を披いているのだろう。三首目は六十七歳。自宅改築のため仮住まいへの引越。運んだのは良寛像と魏人の俑。この並列も面白い。作品を読むだけではなく像を飾るのは尊崇の念の確たる表れではないか。しかし『白秋陶像』には「文人俑北魏仏像に並べおく白秋陶像眼まぶた伏せいます」の作品がある。

置物のセレクト、そして改築後の家の良寛像も気になる。四首目は七十三歳で入退院を繰り返している頃。父と良寛の最期に自らを重ねた静謐な作品。良寛とは風土だけではなく成育歴、死生観も共鳴するものが晩年にはあったのだろう。

二 良寛の歌の遊戯

月よみの光をまちてかへりませ山路は栗の
いがの多きに

里べには笛や太鼓の音すなり深山はさはに
松の音して

我が心有りや有らずと探り見れば空吹く風
の音ばかりなり

前出の『良寛の世界』で椋二が抄出した三十首ほどの中から三首。その中で椋二は良寛の歌を「最も注目すべきは明確度の高いことであるだろう。表現された事物の輪郭は鮮明、心象もありのまま写され、すべてあいまいでない。その上での濃淡明暗の塩梅が加わる。」としている。万葉集の本歌取りともいわれる一首目。暗闇の五合庵からのぼる月。かへりませの語りのやさしさ。口ずさむたびにはろぼると愉しくなる。里の盆踊りの音と松風の音の対比。どちらも愛しい音。心の有無を探れば大空を吹く風の音ばかり。子供たちの風に書いた天上大風を思う。その多くが手紙に添えられた特定の相手へ心を込めた自筆の歌。平明であるが禅の無常観が底流にあり、清かな温もりを感じる。

風は清し月はさやけしいざ共に踊り明さむ

老の名残に

『良寛歌集』東郷豊治編著

老もせず死にせぬ国はありと聞けど尋ねて
いなむ道の知らなく 同
あづさゆみ春は立てども消ぬものは頭に
積もる雪にぞありける 同

良寛には老いの歌も多い。おどろくほど直截な嘆き。自らの老いをしっかり目を逸らさずに観察し、あるがまま受け止めた歌は遊戯的でもある。盆踊り好きの良寛は老の名残と月夜を踊り明かす。月の秀歌は多い。不老不死の国への憧れ、白髪を立春過ぎても消えない雪と歌う。言葉にすることで、より深く理解しようとしたのだろうか。自分の思いを言葉にして自分の筆で書く。大らかで繊細な美しい文字、余白。二百年の時間が巻きもどされる。

去年の春折りて見せつる梅の花いまは手向

けとなりにつけるかも 同

思ふまじ思ふまじとは念へども想ひ出して

は袖しぼるなり 同

うちつけに死なば死なずてながらへてか、

る憂き目をみるがわびしさ 同

いま世界中で新しいウィルスが猛威をふるっているが、良寛の時代には天然痘が大流行して多くの子供たちが亡くなった。一首目二首目は子どもを失った親に代わって詠んだ歌。

三首目は、三条大地震のときに山田杜皐あてに送った見舞状

「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候、死ぬる時節には死ぬがよく候、是はこれ災難をのがるる妙法にて候」に添えられた作品。東日本大震災から十年の今の私たちの心にも

切々と迫る。諦観ではなく、大きな自然の流れの中の一生。生きているときはありがたく生き、死ぬときは死ぬ。人間の意志ではどうにもならないものは数多ある。歴史を振り返り、良寛の声をしっかりと傾聴したい。

山を降りた七十歳の良寛を訪ねてきた三十歳の美しい貞心尼。瑞々しい相聞歌は貞心尼編の『はちすの露』にある。

つきてみよひふみよいむなやこ、のをとをと納めてまた始まるを

はじめて良寛を訪ねたが留守。手毬に歌を添えて帰った貞心尼への返歌。謎かけのようだが、手毬を十までついたらまた一から。十を繰り返す回転する時間は輪廻にも通じる。

夢の世にかつまどろみて夢をまた語るも夢もそれがまにまに

かりそめの事とな思ひそこの言葉言の葉のみと思ほすな君

いついつと待ちにし人は来たりけり今はあひ見てなにか思はむ

一首目は二人の初対面の時の良寛の返歌。夢であるこの世で微睡んで見る夢を語るのもまた夢。七十歳過ぎとは思えないロマンチックな大人の返歌。結句のそれがまにまには禅の思想が窺える。二首目は歌の言葉について尋ねた貞心尼への返歌。言葉はその場限りではなく大きな力を持っている。人をも傷つけ、逆に慰められることもある。愛語、戒語を多く遣した良寛。経典をはじめ和漢の書物を読み、万葉集や古今集はほとんど暗記していたというが選ぶ言葉は簡明で、韻律

も大切にしている。相思の遊戯のなか若き弟子との絆は堅実となる。三首目は待ちわびていた貞心尼を迎える老い衰えた良寛。死を間近にしても自然体で、シンブルライフをつらぬいた良寛は貞心尼に看取られて七十四歳で示寂。

三 良寛遺愛の鞆

衣の袖にいつも手まりを入れていて、子どもたちに出会ったら一緒に遊んだ良寛。その遺愛の手鞆を北原白秋はわざわざ送ってもらっている。第十歌集『黒檜』の「良寛遺愛の鞆」の詞書に「喜びかぎりなし。この鞆、見るからに円く稚く、赤と青にてかがりたるが、手垢黒くついでいとめでたし」とある。五十歳過ぎ薄明微茫の白秋が懇願した良寛の手鞆。貞心尼への返歌「つきてみよひふみよいむな」を引いてつきて見む一二三四五六七八九の十手もて

数へてこれの手鞆を

おほつかな鞆のありどの手を逸れて音なか

りけり霞むこの昼

良寛の遺愛の鞆を手でついでみる白秋。柳川にはさげもん

という美しい刺繍の鞆がある。白秋の鞆つき歌の「うさうさ兔」。手鞆のなかに手と耳のない兔が入っていて跳ねているから九つ十と手について追い出した、というシュールな鞆つき歌。短歌、詩、童謡と言葉を自在に表現した白秋だが、歳を重ねると次第に静かに淡い作品が多くなる。

小高賢は『宮柊二とその時代』で『独石馬』にさしかかるころから、宮柊二の作品に、やや退屈してくることを正直に告白しなければならぬ」と述べる。柊二の歌に良寛が

あらわれる頃だ。一方、桑原正紀は『歌の光芒』で「症状は確実に悪化し、老いも深まっていくなかにあつて、文字通り懸命に自己や事象を把握している。しかし、深刻さはどこか希薄である。平明で自在な詠み口が印象深い。」「若くして薫陶を受けた白秋への郷愁、回帰志向ではなかったらうか。」と述べ、剛直も平明も、述志も叙景もすべてその時々「素直懸命」な心のありようの結果としている。柘二が白秋の秘書を務めたのは「多磨」創刊の昭和十年の夏から十四年にかけてだから、柘二は白秋のもとに届いた良寛遺愛の手鞠を目にしたのではないか。数十年のち同じ病に苦しむ柘二。良寛への思いはより切実だったのだらう。

この庭で手鞠遊ばむ待ちがたく孫の童を待
つ春のあけぼの

わが歌は田舎の出なる田舎歌素直懸命に詠
ひ来しのみ

『純黄』

宮柘二は中学時代、良寛研究者の相馬御風に投稿している。良寛を思い孫の手鞠を楽しみにしている春のあけぼの。「つくたびに逸れゆく赤き鞠を追ふ幼児二歳鞠つきそめて」から三年後の作品。生の証明とは歴史という大きな縦の流れの中で自他をしつかりと観察することから始まるのではないか。素直懸命はまさに良寛の生き方。生家の衰退、出家、修行を乗り越えた後の良寛の明るさ。銜いのなさ。別のパーソナリティがもう一人の自分を感じするようにその時分の歌を作り続ける。平明自在に。そこから徐に生ずる愉しむゆとりが老いらくの遊戯だらう。

団扇とてあまり丸きは見よからず扇の角を
少し加へて

『良寛歌集』東郷豊治編著

それは蓑これは笠とて除き見ればあとの
案山子はなにかなるらむ

同

丸い団扇に扇の角をプラス。少しの遠慮は今でも人間関係の潤滑油。溢れる情報の中に真実が隠蔽され、嘘偽りの罷り通る不思議な時世。外見に騙されないようにという普遍的な社会詠。大切なものは目に見えないと案山子が吠えているようだ。この二首は本稿の良寛の歌の抽出に使用した東郷豊治『良寛歌集』で細分類された項目の最後の戯歌にある。

*

遊戯とは心にまかせて自在に楽しむこと。良寛の歌に心惹かれるのは六十歳前という年齢もあるかもしれない。ゆるやかに老いて、知らぬ間に徐々に軽くなり消えるのが理想だらうか。強靱だが軽やかでこだわりのない良寛の自在さ。前半生に禅の修行を積み、書や漢詩を素直懸命に学んで得た礎。その上に歌を学び年齢を重ねる。宮柘二が作詩の余力といってもよさそうだという良寛の歌。歌集のための歌ではなく心のままの日常の一筆である。短歌は効率化が進む社会で失われてゆくもののひとつかもしれない。歌を詠むことに迷ってしまうのは、不可分に歌は生き方に係わるからだらう。自ら学び体得した知識を積み重ね、気負うことなく人や物と会うことは大切だと思う。思いきり歎び哀しみ心を複雑に展開する。表現はより自由に多様化している。紆余曲折のあと偶成される老いらくの遊戯を信じたい。